

特集

モンゴル訪問・研修報告

『モンゴルの障がいのある人たちに就労の機会を』

●モンゴル訪問の目的

NPO 法人ぱれっとと APDC との出会い、NPO 法人ニンジン（以下ニンジン）とのつながりからです。ニンジンが主催するモンゴルからのエクスチェンジプログラムで、ぱれっとを見学先として受け入れはじめたのがきっかけです。2018年4月、APDC 代表のセレンゲ・サンブーさんがぱれっとで1週間の研修で来日しました。

モンゴルの福祉事情については、知的に障がいのある人たちの働く場が極端に少なく、そもそも彼らが働くという概念が一般市民に浸透していないのが実情です。モンゴルは日本より早く障害者権利条約を批准し、法制度やインフラが整備されてきています。しかし、現状として、彼らが働く機会は殆ど増えていません。こうした背景から、モンゴルの障がい者就労を推し進めるべく、ぱれっとと APDC が協働で社会変革を起こすイベントの企画となりました。

今回の協働イベントの目的は大きく2つあります。

1. 知的に障がいのある人たちが働く可能性を社会に紹介し社会参加を増やす。
2. NPO ぱれっとの就労の取り組みをモンゴルの雇用者や就労機関に紹介する。

研修行程に沿って現地での活動の様子をお伝えします。

●モンゴル労働社会保障省と企業障がい者雇用担当者との懇談会

労働社会保障省では、モンゴルでの障がい者雇用の現状や法制度等のお話を伺いました。権利条約を批准していることから法整備は進んでいる印象ですが、現状が伴っていないのが実情でした。具体的には、企業の障がい者法定雇用率は4%と、日本よりもかなり高い基準が設けられています。達成できない場合は日本と同じようにペナルティが課せられています。法律が厳しく制定されるだけでどのように障がい者雇用を進めていくか行政側から指導援助など何もない状況だと企業雇用担当者は嘆いていました。教育制度は序々に進められてきているようですが、卒業後の自立支援が遅れていることがモンゴルの福祉の大きな課題だと感じました。

懇談会の最中、今回通所員を代表して訪問した、田代さん、村上さんの二人からぱれっとのクッキーを試食してもらいながら普段の仕事のことや給料の額、余暇の過ごし方等の話をしていく中で、参加者の眼差しが二人に強く注がれ徐々に顔つきが変わっていきました。彼らが自分たちの言葉で直接的に伝えられたことは、行政の人たちに大変刺激を与えることができたこと、二人と共にはるばるモンゴルを訪れる

ことができたことに感動をおぼえた瞬間でした。

●ICM rainbow センター障がい児及び児童発達療育センター訪問

【歩行訓練の様子】



ICMは「聖母マリアの純真な心」という意味で、16年前クリスチャンによって設立された施設です。幼児早期療育から学齢期の子どもたちのリハビリ、青年期の就労前訓練が行なわれていました。施設内も見学させていただき、革小物を作ったりグループワークを行なうなど、子どもたちの状況に応じた個別対応をされていて、この施設もモンゴルの障がい児教育では大切な役割を果たしている印象を受けました。

●APDC 訪問

APDCはセレンゲさんの活動拠点です。モンゴル国内に14の支部があり、子供発達支援センターが5か所あります。モンゴルは18の自治区に分かれています。その支部の中核がウランバートルにあります。そこでは羊毛のスリッパづくりや、さをり織りの作業の見学をしました。モンゴルでは、まださをり織りをしている作業所がないとのことでした。腰巻ベルトを試作していましたが、今後の商品構成が楽しみです。

APDCの事業は16歳から30歳の青年が対象で、主に就労支援や就労前訓練を行なっています。障がい児を持つ親やコミュニティに今後どうアプローチし彼等の社会参

加と自立を促進していくかがAPDCのミッションとなっています。

●ダウン症協会運営のカフェ訪問

ダウン症協会の親を中心に運営するカフェは、その子どもが日中働く場として通ってきています。皆さん明るくサポートされながらサンドイッチとコーヒー、蒸し餃子ボールをランチに振舞っていただきました。ランチセットは200円と、リーズナブルですが、場所が通りから入ったところで、売り上げに苦戦していました。お店の雰囲気はとてもお洒落で、ぱれっとのカフェの運営に生かせないか、ぱれっとのメンバーが継続的に携われるカフェにしたいと考えている最中なのでいい機会となりました。



【理事の黒澤さんとカフェのメンバー・言葉の壁を越えて】

●APDC 主催エキシビジョン開催

田代さんは、しおミルククッキーの型抜きをし、慣れないオーブンで焼き、無事来場者に食べていただくことができました。村上さんはこの日のために頑張ってもらった練習をしてきました。障がいがあっても就労が出来るということを二人はしっかりとモンゴルの社会に向けて発信していました。APDCでは、さをり織りのデモンストレーションを行なっていました。まだまだ課題の残るエキシビジョンでしたが、主催したAPDCの皆さんに谷口さんから「エキシビジョンをまた開催したいですか?」との質問に力強く「はい」と答

えていたことに来年の意気込みを感じました。社会に向けて新たな一歩を踏み出したセレンゲさん達を、これからぱれっとがどうサポートしていくかが今後の課題です。

●障がい児体験型宿泊施設見学

代表のゾルボーさんが運営するサマーキャンプ場はウランバートルから車で2時間程離れた高原にありました。山間を車に揺られて着いた場所には、私達が思い描いていたモンゴルの大自然が目の前に広がっていました。学校が夏休みの時期、障がいのある方と学生ボランティアがペアになって宿泊体験出来る施設です。子どものスピーチセラピストも常駐し、自然の中で遊びを体験しながら成長を促す活動は、モンゴルならではの感じました。

絞りたての牛乳で作るおかし作りの体験をしました。モンゴルに来て初めてゲルを見ましたが、中は暖かく、暖房は牛糞を干して乾燥させたものを燃料にしているそうです。モンゴルの大自然に触れ、大役が終わった田代さん村上さん、そして私達もモンゴルの大自然を満喫しました。

(工房ぱれっと職員 宮越三映子)

【大自然に囲まれたキャンプ場】



●感想 おかし屋ぱれっと 田代和裕

デモンストレーションはとても緊張しましたが、いつもの通りに頑張りました。私は、型抜きで、しおミルククッキーを作りました。試食で来場者の方々に食べていただきました。美味しいと言ってもらい、とても嬉しかったです。おかし屋のクッキーも売れて良かったです。私の絵も展示していただきました。数名の方に売ってほしいと言われましたが、今回は、展示するだけと決めていたので、売りませんでした。でも、とても嬉しかったです。モンゴルでの仕事をやり遂げて安心しました。その他にペアレンツミーティングの時に、モンゴルでは、障がいのある人の仕事先があまりないと知り大変だと思いました。今回モンゴルで沢山のことを体験出来ました。これからの仕事に活かしたいと思いました。



【田代さんの世界観が広がります】

●感想 おかし屋ぱれっと 村上あい

私はデモンストレーションでは、らぶらびを作りました。いつもはおかし屋で働いていますが、この日のために週一回工房で縫う練習をしました。とても緊張しましたが、練習通りに出来ました。お客様から、らぶらびが可愛いと言われました。テレビ取材もありドキドキしました。働く姿をモンゴルの方々に見てもらえてよかったです。また挑戦したいと思いました。

●ボランティアで参加して

今回のイベントの意義は、ぱれっとの通所員、親御さんがモンゴルを訪れ、現地との関係者と交流できたことだと感じています。APDC 関係者やイベント参加者が「自分たちもできるのではないかと意識を変えることに繋がったのではないのでしょうか。

イベント当日は、APDC 関係者を中心に、参加者が、田代さん、村上さんのデモンストレーションに注目し、意欲的に質問をしていた姿が印象的でした。現地の人たちに与えた影響だけではなく、二人にとって初めての海外で、自分たちの仕事を現地の人に伝えられたことは大きな自信に繋がったのではないかと思います。文化が異なる現地の人と交流して、仕事のフィードバックをもらえる機会があること、PIJ の醍醐味だと再認識しました。

イベントに関しては、広報や事前準備に課題があったと感じています。APDC の組織・マネジメント体制については短期間で変わるものではないと思います。今回のイベントを通じて、海外の支援は5年～10年の時間軸で支援する覚悟と計画が大切だと改めて感じました。日本では当たり前根付いている、おかし屋ぱれっとの仕事環境、親の会の存在などが、モンゴルでは、まだ自分たちだけでは当事者意識をもってつくるまでには至らない現状だと感じました。国を超えた活動は、中長期の視点が重要で、PIJ としてどのような立ち位置で関わるかは、ぱれっとが組織として考えていく必要があると考えています。

(NPO 法人ぱれっと 理事 黒澤友貴)

●ペアレンツミーティング報告

娘のあいの生い立ちに沿って、いろいろな方に出会い助けられたことをお話ししました。学生時代は恩師、療育での人との出会いがありますが、就労した今も地域活動を通しての出会いが娘の成長に繋がることがあり、親子で外との繋がりを持つ大切さを伝えました。地方都市から何時間かけて参加されている方、建設ラッシュのウランバートル市内と環境が異なる方がいる中で、どれだけその大切さが伝えられたか疑問です。なぜなら、ウランバートルから車で1時間程離れると、近隣の建物が見える環境で、何か一緒に活動することがあるようには感じられませんでした。質疑応答の中、数名の保護者がぱれっとでの研修を希望していましたが、私はむしろ、今モンゴルに必要なのは雇用側の研修なのではないだろうかと感じました。

モンゴル滞在中ウランバートル市内を歩いていて、高齢者を見かけることがほとんどありませんでした。通訳の方にモンゴルの高齢福祉についてお聞きしたところ、親の面倒は子どもが見るのは当然という風習があり、日本のような介護施設は無く年金制度がある程度だと言います。働きながら親の介護が困難な人もいるはずなのに、高齢者福祉がそのような状況であるならば、障がい者福祉が後回しになる状況も頷けます。

今回、モンゴル親の会が初めの一步を踏み出したところなのだと思います。ぱれっとがモンゴルに出向き関わることで、国内の親の会のつながりを強くし、行政へ働きかけ、障がい者福祉の取組に大きな変革をもたらせてくれることを期待しています。

(ぱれっと親の会 村上春奈)

●APDC 代表 セレンゲ・サンブー

モンゴルの知的に障がいのある人たちの生活は、30~40年前の日本と変わりません。一般市民は彼等を哀れみの対象と思い、何もできない人たち、迷惑にならないように一般の人から遠ざけるべきととらえています。一般市民は、彼らが地域で働き暮らすことなど思いもよらないのです。

昨年から、APDCはモンゴルでの障がい者就労に向けた啓発活動に奮闘していました。今回のイベントは、まさに彼らに対する偏見を打ち破る社会的変革としての新たな取り組みです。ぱれっとから障がいのあるメンバーを含む10名が来蒙したことは、モンゴルの障がい者就労に対して画期的なことで、政府関係や雇用者に対する影響は大きいと感じています。エキシビションは13団体の参加と50種類の製品が販売され、200万トゥグルク(82,000円)の売り上げがありました。私たちとしては、働きたいという彼らの声を一般社会に響かせることが重要だととらえています。この経験を機に、モンゴル国内でネットワークを広げ、毎年このようなイベントを続けていく覚悟でいます。多様な雇用を行なうぱれっととの協働企画はAPDCとしてとても大きな経験でした。田代さんや村上さんとの出会い、そして二人の働きぶりや社会的自立度はAPDCのメンバーにとって大きな収穫でした。最後に、モンゴルの障がいのある人たちの就労に向けて勇気と希望を与えてくれたぱれっとのみなさんに感謝を申し上げます。これからも仲間として共に在りたいと願います。(S. Selenge)

●PIJとAPDCとの今後のつながり

反省会の中で、APDCのスタッフからは、初めてのイベントをやり遂げた満足感と、次回のイベントに対する意欲が全員から伝わってきました。しかし、今回は全てのスタートが遅く、スタッフ間で役割分担をしたにもかかわらず、それぞれの課題が共有されていませんでした。そして何よりも、イベントの目的が明確でなかったことが指摘され、そのためには、APDCの代表の役割をもう一度確認し、実行委員会では課題を全員で確認しながら進めていくことが必要であることを再認識してもらいました。今回のイベントを土台に、さらに内容のあるものを創り上げる為に何が必要なのかをそれぞれが真剣に考え、それに沿った多くの質問を通して私が興味深く感じたことは、どのスタッフも自主的に関わろうとする姿勢でした。

これからのAPDCの活動を進めていくために重要なことは、今回のようなイベントだけでなく、他の事業も含めて1年間のスケジュールを立て、それに沿って調整・修正し、その一つひとつの目的を明確にすることが不可欠であると説明し、スタッフもそれを受け止めようと努力していることが伝わってきました。代表の強い思いだけでは今後の活動の継続は難しいとセレンゲさん自身が認識したようで、「ぱれっとで、組織マネジメントをもっと学びたい」という感想を聞いて、ぱれっとの今後のAPDCへの協力・支援の内容を再検討する必要があると思いました。

(PIJ代表 谷口奈保子)

プロジェクト参加メンバー：谷口奈保子・相馬宏昭・宮越三映子・村上あい・田代和裕・村上春奈・田口雄一・黒澤友貴・カンナル・植木外喜子
現地パートナー：APDC (Association of Parents with Differently-abled Children) モンゴル障がい児親の会